

侯爵夫人は博士に助けられて立上つた。彼女は立つ事が出来ぬほどに弱つてゐた。彼女は躡きながら博士と刑の執行人との間を前へ進んだ。執行人は宣告の朗讀後直ちに彼女の監督の責に當つたので、宣告が完全に執行さるゝ迄は彼女の傍を離れる事を許されなかつた。三人は禮拜堂に行き、内陣に入つて、博士と夫人はそこで跪いた。その途端に五六人の人が好奇心に馳られて木堂に現はれた。そこで執行人は、夫人がそれに煩はされないやうにと内陣の戸を閉め、彼女を籠子の後へ連れて行つた。彼女はその椅子に腰掛けた。博士は彼女に向合つて腰掛けた。その時博士は窓から射す光で彼女が非常に變つてゐるの

を初めて見た。いつも眞青であつた顔はほてり、眼は輝いて熱にうるみ、身體全體がぶるぶる顫へてゐる。博士は二言三言慰めの言葉をかけたが、彼女はそれに心を留めなかつた。『私の宣告は恥いしものですが御存知ですか。あの宣告には火を含むのである事がお分りですか？』と彼女は云つた。

博士は答へなかつた。そして執行人に葡萄酒を持つて来るやうに命じた。直ぐに執行人は葡萄酒を入れたコップを持つて來た。博士はそれを夫人に渡したが、夫人は一寸唇を濡ほしただけで、それを返へした。やがて彼女は頸が蔽はれてゐないのを見て、手巾を出して巻き付け、それを留めるピンを持つて來

てくれと看守に云つた。看守がぐづくして、ピンを持つて来ないのを見ると、彼女は彼がピンで窒死を企てやしないかと怖れてゐるのを見て取つて、頭を振りながら、悲しげに微笑を浮べて云つた。『もう何にも心配する事は要りませんよ。私がもう自害したりなんかしない事はこのお方が誓つて下さいますよ。』
 『奥さん、』と看守はピンを彼女に渡しながら云つた。『お待ちせして濟みませんでした。誓つて申しますが、私はあなたを信じて居ります。他の者があなたを信じなくとも、私は信じて居ります。』

そして看守は彼女の前に跪いて、彼女の手に接吻しやうとします。

た。彼女は手を與へて、自分のために神を祈つてくれと乞ふた。
 『宜しうございますとも、』と彼は歎息しながら云つた。『心の底から祈りませう。』そこで夫人は出来るだけうまく着物をピンで留めた。そして看守が立去つて、博士と差向ひになると、彼女は云つた――

『先刻私が申上げた事はお聴きにはなりませんでしたが、私の宣告の中には火を含んでゐると申上げたのです。私の身體が焼かれるのは、私の死んでからではあります、それで私の記憶はいつ迄もひどい辱めを受ける事となるでせう。私は生きながら焼かれる事を免れました。そして、絶望の死から免れまし

た。ですが、恥辱は同じ事です。私はそれを考へて居たのです。』
 『奥さん、』と博士は云つた。『あなたの肉體が火の中へ投込まれ
 やうと、灰にならうと、土の中へ埋められやうと、虫に喰はれ
 やうと、刑場用櫓の上へ載せて曳かれ、埃溜の中へ放込まれや
 うと、東洋の香料で木乃伊にされて立派な人の墓場へ葬られや
 うと、あなたの魂の救ひには何の關係もないのです。あなたの
 最後がどうであつても、あなたの身體は定めの日に天に上るの
 です。神様にその御意志があれば、あなたの身體の灰は黄金の
 柩に入つてゐる王者の死骸よりも、光榮に充ちる事となるので
 す。奥さん、葬式は生きてゐる人のためで、死んだ者のためで

はないのです。』

二二、死に面する心

内陣の戸口で物音が聞えた。博士は何事が起つたのかと見に行つた。と一人の男が中へ入らうとして執行人と争つてゐた。博士は近づいて、どうしたのだと訊いた。その男は馬車屋で、夫人が巴里を出發する前にその男から馬車を一臺買ったが、彼女は代金の一部分を支拂つただけで、まだ二百ルーブル借りがあるのであつた。馬車屋は夫人から受取つた書附を見せた。それには夫人が支拂つた金額がちやんと記されてゐた。その時、

夫人は何事が起つてゐるかとは知らず、聲をかけた。博士と執行人は彼女に近づいた。『もう私を連れに来たのですか、』と彼女は云つた。『まだ私はよく準備が出来てゐないんです。でも、ようございませう。行きませう。』

博士は彼女に出来事を話した。『その人の云ふ通りです。』と彼女は執行人に云つた。出来るだけ早くお金は拂ふと云つて下さい。』そこで、執行人が立去ると、彼女は博士に云つた。『今から出掛けなくちやならないんですか。もう少し時間を與へて貰ひたいと思ひます。何時でも行くには行きますが、今も申上げた通り、まだ本當の準備が出来てゐないのです。お宿しを願ひま

す。教父様、私の心を亂したのはあの拷問と宣告です。地獄の炎のやうな私の眼の中に燃えてゐるこの火です。あれからずつと私をあなたのお傍に置いてくれたら、今私の救ひはもつと希望を持つ事が出来たでせう。』

『奥さん、』と博士が云つた。『夕方までの時間を、あなたは氣を鎮め、なすべき残つてゐる事に就て考へるためにお使ひになる事が出来ると思ひます。』

『いゝえ、』と彼女は微笑みながら云つた。『あの人は、火炙になるときの可哀相な悪人のためにそんな好意を見せてはくれませぬ。用意が出来たらあの人たちは知らせに来るだら

う。さうすると、私たちは出掛けねばならぬのです。』
 『奥さん、』と博士は云つた。『私はきつとあなたの御必要な時間をくれるだらうと思ひます。』

『いえ、いえ、』と彼女は突然、焦々して答へた。『いえ、私はあの人たちを待たせはしません。被刑人護送馬車がこの戸口へ来ると直ぐ、あの人たちは私に知らせてくれ、はい、のです。さうすれば、私は行きます。』

『奥さん、若しあなたに神様の御前に立つ準備が出来てゐると見たら、私はあなたをお引留めはしません。あなたの現在の立場では、猶豫を乞ふ権利はないので、時が来たら直ぐ行かねば』

ならぬのですからね。しかし、誰でも基督のやうな用意は出来ないものです。基督は祈禱から立ち上り、弟子たちを起して、園を立去り、敵に出遭ふためにお出掛けになつたのです。今はあなたは弱いのです。今彼等があなたを連れに来たら、私はあなたを留めずにはゐられません。』と博士が云つた。

この會話を聞いてゐた執行人は何思つたか、
 『御安心なさい、時はまだ来ません。』と云つた。

執行人はどうかして自分の云ふ事を夫人に信じさせたいと思つた。急ぐ必要はありません。二時間や三時間ではまだ出掛ける事は出来ないんです。』

一九六
この言葉は、やゝ侯爵夫人を落着かせた。彼女は執行人に感謝した。それから博士の方を向いて云つた。「私はこの珠玉が、この人の手に渡るのを好みません。それはこの人が珠玉を善い事には使ふまいと思ふからではありません。この人はこんな商賣をしてゐますけれども、やはり私どもと同じやうに基督信者だと私は思ひますからね。ですが、私はこれを誰か他の人に遺品としたいのです。」

二二、形見の珠數

侯爵夫人は、遺品として誰にを送りたいと申し出でた。

「奥さん、」と博士は云つた。「お望みを伺つて置いてその通り取
斗らひませう。」

「あゝ！」と彼女は云つた。「姉の他には誰もいないんです。ですが、姉は私が犯した罪を覚えてゐて、私の持つてゐた物に觸るのを怖がりはしないかと、それが氣がゝりです。若し姉がそれを氣にかけないのなら、私の死後姉がそれを身に着けてゐてくれるといふ事は私にとつて非常な喜びです。それにこれを見る
と姉は思ひ出して私のために祈つてくれるでせうからね。でもあんな事があつたのだから、この珠數はきつと忌はしい思ひ出
を呼起すでせう。神様、神様！ 私は極悪人でございます。あ

なた様は本當に私を宥して下さるのでせうか。』

『奥さん』と博士が答へた。『ドオブレー嬢に就いては、あなたのお考は間違つてゐると私は思ひます。あの人の手紙によつてあの人があなたに對しどんな感情を持つて居られるかお分りでせう。あなたは最後までこの珠數でお祈りにならなければいけません。あなたのお祈りを途切らしたり、搔亂したりしてはいけません。どんな罪人でも祈を中止してはならないのです。奥さん、私はこの珠數を喜んで受取る人の所へそれを渡す事をお約束いたします。』

すると、朝から斷へず動搖してゐた侯爵夫人は、博士の好意

を感謝し、やつと、前のやうに熱心な祈禱に返へる事が出来た。彼女は七時まで祈つた。時計が七時を打つと、執行人が黙つて入つて来て、彼女の前に立つた。彼女は最後の瞬間が来たのを見て、博士の腕を掴んで云つた。『もう少し、ほんの二三分間どうぞ。』

『奥さん』と博士は立上つて云つた。『これから聖餐の潔い血を讚美し、まだあなたの心の中にあるすべての汚れや罪が潔まるやうに祈りませう。さうしてあなたの御希望通り處刑の猶豫を得ませう。』

そこで執行人は一旦弛めた繩で再び彼女の兩手を縛つた。彼

女は前へ進み出て、博士と禮拜堂牧師との間にあつて、龕子の前に跪いた。禮拜堂牧師は白法衣を着てゐた。彼は和讃を唱へ、聖餐の祝福を述べたが、その間夫人は跪いて床に顔をすりつけてゐた。そこで執行人は襯衣の用意をするために先きへ進んだ。彼女は博士と執行人の助手とに支へられて禮拜堂を出やうとした。彼女はかうして進みながらも困惑と混亂とを感じた。禮拜堂の外には十二三人の人が待つてゐた。それを見ると彼女は縛られてゐる手で頭飾を顔の方へ引下ろした。その時珠數の緒が切れて、珠が五つ六つ床の上へ落ちた。彼女はそれに氣が附かずに進んだが、博士と助手は彼女を引留め、身體を屈めて珠を

拾ひ、それを彼女に渡した。彼女はその親切を感謝して、助手に云つた。私はもうこの世では何の所持品をも持つてゐない事を知つてゐます。私が身につけてゐる物はみんなあなたの物です。私はあなたのお言葉がなければ私の持物を人に與る事が出来ません。ですが、どうか後生ですから、私の死ぬ前にこの珠數を博士に與へる事をお許し下さい。私は博士にお頼みしてこれを姉に與へたいのです。どうかお願いいたします。』

『奥さん』と助手が云つた。被刑人の持物は全部吾々のものになる慣例になつて居ります。しかし、あなたはあなたの持物の主人でゐらつしやるんですから、その品が値の物でしたら、あ

なたの御自由になすつていゝのです。』

博士はその時彼女の身體が顫へるのを腕に感じた。執行人助手の言葉は、生れつき尊大な彼女にとつては、非常な侮辱であつたに違ひない。しかし、彼女は身顫ひを抑制し、顔へはそれを現はさなかつた。

二三、公然の謝罪

その時彼女は監獄の車寄に近づき、『公然の謝罪』をなす準備のためそこへ坐らせられた。彼女は歩一步處刑臺に近づくのであつて、出來事の一つ一つが彼女を不安にした。彼女が自暴的

に後を振り返へつて見ると、執行人が手に襯衣を持つて出て來た。玄關の戸が開いて、五十人ほどの人が出て來たが、その中にはソアツソン伯爵夫人、レフユージ夫人、スクデリー嬢、ロクロール氏、シメイ僧正等がゐた。それを見ると、侯爵夫人は恥しさで眞赤になつて、博士を振り向いて云つた『あの人は拷問所でしたやうに私の着物を剝ぐのでせうか。あれはあんまり残酷です。私の心は、思はず神様から離れます。』

夫人の聲は低くかつたが、執行人はそれを聞きつけて、着物の上へ襯衣を着せるので、着物を脱がせるのではないと云つて安心させた。そこで彼は近づいた夫人は如何に自分の現狀を恥

かしく感じてゐるかを眼容で博士に知らせた。執行人は夫人に襦衣を着せるために、手を縛つてゐた繩を解き、彼女が引下けてゐた。頭飾を上へ揚げてそれを彼女の頸のまわりへ結へ附けた。そして両手を一本の繩で縛り一本の繩を腰に廻はし、更に今一本の繩を頸へ巻き附けた。次ぎに彼は彼女の前へ跪いて、靴と靴下を脱がせた。すると、夫人は両手を博士の方へ差延べた。

『あゝ、この人たちのする事を見て下さい。来て私を慰めて下さい。』

博士が直ぐに近づいて、自分の胸で彼女の頭を支へ、彼女を

慰めやうとした。が、夫人は穴のあくほど熱心に自分を眺めてゐる群集を悲しげに見詰めて叫んだ。『あゝ、あの人たちの好奇心はあまりに残酷で、野蠻ではありませんか？』

執行人は侯爵夫人に燃えた炬火を持たせた。彼女はそれをノートル・ダム寺院まで持つて行つて、そこで、『公然の謝罪』をしなければならぬのであつた。炬火は重さ二磅で、非常に重いので、博士が右の手でそれを支へてやつた。その間に書記が再び宣告文を聲高かに讀み上げた。博士は夫人がそれを聴かずに絶えず神と交らせやうとして全力を盡した。しかし、

『被告ドオブレは跣足のまゝ、頸に繩を着け、両手に重さ二

磅の燃ゆる炬火を持ち、被刑人護送馬車に乗りて』といふ文句を聞くと、夫人は眞青になつた。玄關に近づいて、庭で待つてゐる群集を見ると夫人の顔は痙攣り、身體は足を地面の中に埋めやうとしてでもゐるやうに屈んで、彼女は悲しげな、しかし荒々しい聲で博士に云つた。『私がこんな目に遭つた後で、夫ブランヴァイリエルはこの世に生きてゐられるでせうか？』

『奥さん、』と博士は云つた。主はその弟子たちに別れる時、神に弟子たちをこの地上から除きたまへとは祈られなかつたのです。すべての罪から弟子たちを守りたまへと祈られたのです。奥さん、あなたもブランヴァイリエル氏のために神の恵みが常に

かの人の上にあるやうお祈りなさい。』

が、博士の言葉は無益であつた。その瞬間に羞耻の感情はますます強くなつた。彼女の顔は痙攣り、眉は蹙み、眼は炎を吐き、口は歪んだ。その形相は怖ろしかつた。悪魔は再び彼女を虜にしたのである。この痙攣状態は二十分ばかり續いたが、その時傍にあつて彼女の顔を見てゐた有名な畫家のルブルンは翌晩眼前にその顔がちらついて、眠られなかつたといふ事である。ルブルンがその印象によつて夫人の怖ろしい形相を描いた名畫は今も尙ルヴァル博物館に陳列されてゐる。

前庭は非常な群集で進む事が出来なかつたので、乗馬の射手

が人々を押し除けて道を開いた。侯爵夫人はやつと外へ出た。博士は見物人の視線のために夫人が心を亂しはしないかと考へて、彼女に十字架を持たし、それを見詰めてゐるやうに勧めた。彼女は被刑人護送馬車の待つてゐる場所まで行く間この勧告に従つた。が、その時彼女は眼を擧げて辱かしい物を見た。それは泥まみれになつた極く小さな荷車で、腰掛はなく、たゞ底に僅かばかりの藁が敷いてあるだけであつた。荷車はこの辱かしい運搬に相應する醜い馬が曳くのであつた。

執行人は最初に夫人を乗せた、彼女は人目を避けるやうに素早く乗つた。夫人は車の左の隅の藁の上へ野獸のやうに蹲まつ

た。博士は彼女の右側へ坐つた。次ぎに執行人が博士の向側へ坐つた。執行人の助手は馬を御するため博士や夫人と背中合せになつて車の前方に坐つた。

車が二三歩進むと、暫らくの間やゝ穩かであつた。夫人の顔が再び痙攣を始めた。絶えず十字架を見詰めてゐる彼女の兩眼は炎を放ち、その苦しいやうな氣が狂つたやうな眼容は、博士を戦慄させた。博士は夫人が何ものかを見て昂奮したに違ひないと思つて、それが何であるかを彼女に尋ねた。

「何でもないんです、何でもないんです、」と彼女は口早やに答

二二〇
へた。そして博士と向ひ合つて坐つてゐる執行人に向つて云つた。『どうか私をあなたの前に置いて下さい。私をあの人から隠して下さい。』かう云つて、夫人は乗馬で車の後を追ふてゐる男の方を指示し、博士の持つてゐた炬火を下へさげ、十字架を落した。『執行人は後を振り返つたが、『宜しい、分りました。』と點頭きながら云つて、彼女の望み通り脇へ寄つた。博士はどうしたのかと聞いた。と、彼女は云つた。『詰らない事なんですよ、私が弱いために私をひどい目に遭はせた人を見るに耐へないんです。車の後を追つてゐるあの人は、リエージュで私を捉へて、途々私をひどい目に遭はせたデスグレーです。あの人を見ると

私は先刻のやうにどうにも我慢が出来なくなつたのです。』
『奥さん、』と博士は云つた。『私は懺悔の時あなたからあの人の事を聞きました。が、あの人はあなたを捕縛するために派遣されたのです。あの人は責任があつたので、あなたを嚴重に監視したので。苛酷であつたかも知れないが、それはあの人が命令を遂行したに過ぎないのです。奥さん、耶穌基督は御自分の死刑執行人を罪惡の使徒、不正の僕と見做して居られました。が、それでも死に就かれる時には、彼等のために祈りたまふたのです。』

夫人の心の中には、苦しい闘ひが續けられ、それが彼女の顔

に現はれてゐた。が、それはほんの瞬間で、長く痙攣るやうな身顛ひの後、彼女は再び平靜になつた。そしてかう云つた――

『あなたのおつしやる事は本當でございませう。あんな事を思つたのは私が悪うございました。神よ、容したまへ。處刑臺の上でああなたが私の罪の宥しを與へて下さる時に、この過失をも容されるやう神様に祈つて下さい。』次に彼女は執行人に向ひ、

『デスグレーさんが見えるやうに、前の所に坐つて下さい。』と云つた。執行人は躊躇したが、博士の合圖で彼は其通りした。侯爵夫人はデスグレーのために祈りながら、彼の方を正面に見てゐたが、やがて眼を十字架におとして自分のために祈つた。

その時馬車はサント・ゼネヴィエーヴ・デ・アルダンの前を走つてゐた。

二四、斷頭臺上の夫人

車の歩みは徐々としてゐたが、着々と進んで、終にノートル・ダム寺院の廣場に着いた。

射手が群集を押し除けた。車は寺の入口階段に近づいて、そこで止まつた。執行人は車を降り、後の板を取除き、夫人のために手を差延べて、彼女を歩道の上へ降ろした。次に博士が降りた。監獄を出て以來窮屈にしてゐたので、彼の足は痺れて

ゐた。博士は階段を上り、夫人の後に立つた。彼女の右側には
 裁判官が立ち、左側には執行人が立つてゐた。後方には群集が
 押しかけてゐた。會堂の戸はすべて開けひろげられてゐる。彼
 女は跪かされ、今まで博士が持つてゐた炬火を手に持たされた。
 そこで、裁判官が紙に書いた『公然の謝罪』の文句を読み、彼
 女がそれに隨いて文句を繰返へしたが、聲が低いので、執行人
 が聲高かに叫んだ。『同じ事を云ふのだ、もつと高く、もつと高
 く！』で、彼女は聲を擧げて聲高かにしつかりと次ぎのやうな
 謝罪の文句を繰返へした。

私は不届にも復讐のために、父と二人の兄を毒殺し、妾を

毒殺しやうと企み、その財産を手に入れやうとしました事
 を自白致します。私は神と、國王と、吾が國の法律の許し
 を乞ひます。

『公然の謝罪』が済むと、執行人は再び夫人を護送馬車に乗せ
 た。炬火はもう持たせなかつた。博士は彼女の傍に坐つた。馬
 車はラ・グレーヴに向つて進んだ。彼女はその時から處刑臺に
 着くまで、博士が彼女の眼前で支へてゐる十字架から眼を離さ
 なかつた。博士は斷へず宗教上の言葉をもつて彼女を勵まし、
 車の周圍で見物人が吐いたり罵つたりする怖ろしい騒ぎのため
 に彼女の注意を散らすまいと努めた。グラーヴの廣場に着くと

車は處刑臺から少し離れた所で停まつた。その時、裁判官のド
ルーエー氏が乗馬で近づいて、夫人に向つて云つた。『もう何も
云ふ事はないかね？ 何か云ふ事があつたら、こゝにゐる十二
人の委員がそれを聞くから。』

『奥さん』と博士が云つた。『もう私たちの旅は終りました。神
様に感謝なさい。あなたは途中で忍耐力を失はなかつたので
す。今迄受けられたすべての苦痛を無駄にせぬやうになさい。
これ迄に自白された事以外にまだ隠して居られる事があつたら
今こゝで自白なさい。』
『私は自分の知つてゐる事をすべて自白しました。もう何も云

ふ事はありません。』と侯爵夫人は云つた。

『大きな聲でもう一度お云ひなさい』と博士が云つた。『みんな
に聞えるやうに。』

そこで、婦人は聲を張り上げて繰返へした。

『私は自分の知つてゐる事をすべて自白しました。もう何も云
ふ事はありません。』

この宣言が済むと、護送馬車は斷頭臺の方へ進められたが、
見物人が密集してゐて、助手が四方八方を鞭で打つたにも拘ら
ず、道を進む事が出来なかつた。で、車は斷頭臺の少し手前で
停まらねばならなかつた。既に車から降りてゐた執行人は梯子

の具合をなほしてゐた。侯爵夫人は落着いて、感謝するやうに博士の方を見てゐた。車が停つたのを知ると、彼女は云つた。『まだこゝでお別れするのではないでせう。あなたは私が首を斬られる迄私の傍を離れないとお約束なさいました。私はあなたが約束をお守りになる事を信じます。』

『守りますとも、』と博士は答へた。『あなたの亡くなる瞬間迄はお別れしません。それは御安心なさい。私は決してあなたを見棄てはしません。』

『どうか處刑臺の上に登つて、私の傍にゐて下さい。』と彼女は云つた。『さア、私は今こゝであなたに最後のお別れをいたしま

す。處刑臺の上では氣が散るかも知れませんが、こゝであなたにお禮を云はせて頂きます。私がこの世の裁判の宣告を受け神様の御審判の宣告を聴く準備が出来たのは、全くあなたのお蔭です。私は深く感謝いたします。どうかあなたに御厄介をかけた事をお宥し下さい。』

涙が喉に塞つて、博士は答へる事が出来なかつた。

『あなたは私を宥しては下さらないんですか？』と彼女は繰返へした。この言葉で、博士は宥すと云はうとしたが、口を開いたら歎息をなさうに思はれたので、彼はやはり黙つてゐた。侯爵夫人は三度博士に訴へた。『どうか、後生ですから、宥して下さい。』

さい。あなたが私と一緒に時をお過ごしになつた事を悔んで下さいませすな。私が死ぬ瞬間に「ド・プロファンデイス」(譯者註、聖者諸篇中の言葉)を唱へて下さい。明日は私のために聖餐に就て下さい。お約束下さるでせうね?」

「はい、奥さん。」と博士は涙を呑込んで云つた。「御安心なさい。あなたのお命じになつた事はすべていたしませう。」

こゝで執行人は馬車の板を取除いて、夫人を助け下ろした。二人が處刑臺の方へ歩を進めると、すべての人の眼がその方へ注がれたので、博士はその暇に涙を拭ふた。博士が涙を拭ひ終つた時、助手が彼の手を取つて車から助け下ろした。侯爵夫人

は執行人と一緒に梯子を登つてゐた。處刑臺に上ると、執行人は彼女に首斬臺の前に跪くやう命じた。やがて夫人よりは足許危ふく梯子を登つた博士は彼女の傍に近づいて、彼女の耳に囁く事が出来るやうに向を變へて跪いた。即ち、夫人はセーヌ河の方を向いてゐたが、博士はグイール旅館の方を向いて、二人がかく跪くや否や、執行人は夫人の髪を掴んで、その後部や兩脇を斬り始めた。そして頭をあらこちらと、やゝ亂暴に、廻はして見た。この物凄お化粧は殆んど三十分も續いたにも拘らず、夫人は少しも不平を云はずに、黙つて涙を流す他には苦痛の表情を現はさなかつた。髪を切つてしまふと、執行人は

両肩を現はすために襯衣の上の方を裂き、最後に彼女の兩眼に目隠しをし、顎を掴んで顔を擡げ、頭を真直ぐにしてゐるやうに命じた。夫人は逆はずに云はれる通りした。そして斷へず博士の言葉に耳を傾け、自分の今の状態に應はしい言葉を聞くとそれを繰返へした。

一方、處刑臺の後方の杭が立つてゐる所には、執行人が立つて時々自分の外套の下を覗いてゐた。そこには長い真直ぐな劍の櫛が現はれてゐた。彼は梯子を登る時、夫人がそれを見て恐怖を抱かぬやうに劍を隠し持つてゐたのである。博士は罪の宥しを與へて、後を振返つて見たが、まだ執行人が武器を持つて

ゐないので、次ぎのやうな祈禱をさゝげた。夫人は博士の後に隨いて祈禱を繰返へした。

『ダヴィデとマリアのになる基督様、ダヴィデの娘にして基督の母なるマリア様、私のために祈りたまへ、神様、私は塵のやうな自分の肉體を見棄てます。人々はそれを焼いて、好きなやうにするでせう。しかし、何時の日かそれは昇天して、再び私の魂と合する事を堅く信じます。私は自分の肉體の事を少しも苦にしては居りません。おゝ、神様、私の魂をあなたにさげます。どうか私の魂に安息をお與へ下さい。あなたのお胸へお受け下さい。それは嘗つてあなたのお胸から下さつたので

ございますから、今一度そこへ返へしたまへ。あなたから出てあなたに歸るのでございます。あなたは萬物の源にして初めておらせられます。お、神様、あなたは中心となり、終りとなつて下さい！」

侯爵夫人がこれ等の言葉を云つた時、不意に博士は肉切庖丁が臺の上の肉を斬つたやうな鈍い打撃の響を聞いた。その瞬間に夫人の言葉が止んだ。劍は博士が閃光をさへ見なかつたほどの速やさで撃下ろされた。博士は黙つた。その眉は汗に濡れた。何故といふに、毛髪は逆立ち、夫人の首が落ちてゐないのを見て、執行人が覗ひを誤り、もう一度撃下ろさねばならぬのかと

彼は思つたからである。が、彼の恐怖は直ぐに止んだ。博士がさう思つたのと殆んど同じ瞬間に、夫人の首は左の方に傾き、肩へと迂り更に後へと落ちた。それと同時に、胴體は前方の首斬臺の上に倒れかかり、首の切口から血が流れ出てゐるのが見物人に見えた。直ちに、約束に従つて、博士は『ド・プロファン・デイス』を唱へた。

祈禱が済んで、博士が顔を上げると、彼は眼の前に執行人が顔を拭いてゐるのを見た。『ねえ、』と彼は云つた。『うまい斬りかたぢやありませんか。私がかう云ふ場合にはいつも祈禱をさへげるんです。すると、神様がいつも私を助けて下さいますよ。』

しかし、この奥さんは五六日心配でした。私は六度聖餐に列りましたので、手も心も弛められたやうに感じましたよ。』彼はかう云つて、外套の下から鑷を取出しドラム酒を飲んだ。そして一方の腕に以前のまゝの服装を着けてゐる胴體を抱へ、一方の手に眼隠しをしたまゝの首を持つて、助手が火を點けた薪の上へそれを放り投げた。

『翌日、人々はブランヴェリエル夫人の骨を貰ひに行つた。人々は夫人が聖者になつたと云つてゐた。』と當時の女流文學者セグインネ夫人は書いてゐる。

*

*

*

*

パリを騒がしたこの毒殺事件が結末を告げてから、百三十年ばかり経つた十九世紀の初め、即ち千八百十四年に、ブランヴェリエル夫人がその父を毒殺した館には、ドフモンと云ふ人が住んでゐた。當時佛蘭西は外國と干戈を交へてゐたので、館の主人ドフモン氏は、敵軍の掠奪を恐れて、館の塔の中へ隠れ場所を作り、そこへ銀やその他の貴重品を隠匿した。敵の軍隊はこの地方へ侵入したが、三ヶ月後には遠く國境へ退却した。そこで、主人は隠して置いた品物を取出すためにかの密室に入り、何心なく壁を叩いて見ると、壁の向側に穴でもあるらしい空虚な響がした。不思議に思つて、彼は槓杆で壁を叩き壊し、

石を取除いて見た。と、そこに一見実験室とも覺しき大きな部屋があつて、竈、化學用機具、得體の知れぬ液を入れて密封した罐、四つの色の違つた粉を入れた紙包等を發見した。不幸にも、これ等の物品を發見した人々は、それが左程重大なものでもないと考えた。そして多分恐ろしい性質をもつてゐるものだらうとの恐怖から、それ等の藥品を近代科學の試験に委ねずして全部棄て、しまつた。

かくして、サント・クロアとプランヴェリエル夫人の用ひた毒藥の成分を發見し分析するこの重大な機會——最後の機會は失はれたのである。

大正十年八月二日印刷
大正十年八月四日發行

侯爵夫人の犯罪

定價金六十錢

不許
複製

編輯兼發行人

東京市日本橋區本銀町二ノ八

鷺尾

浩

印刷者

東京市神田區西小川町ノ六

宮田龜

六

印刷人

東京市神田區西小川町二ノ六

大成社印刷所

所

發行所

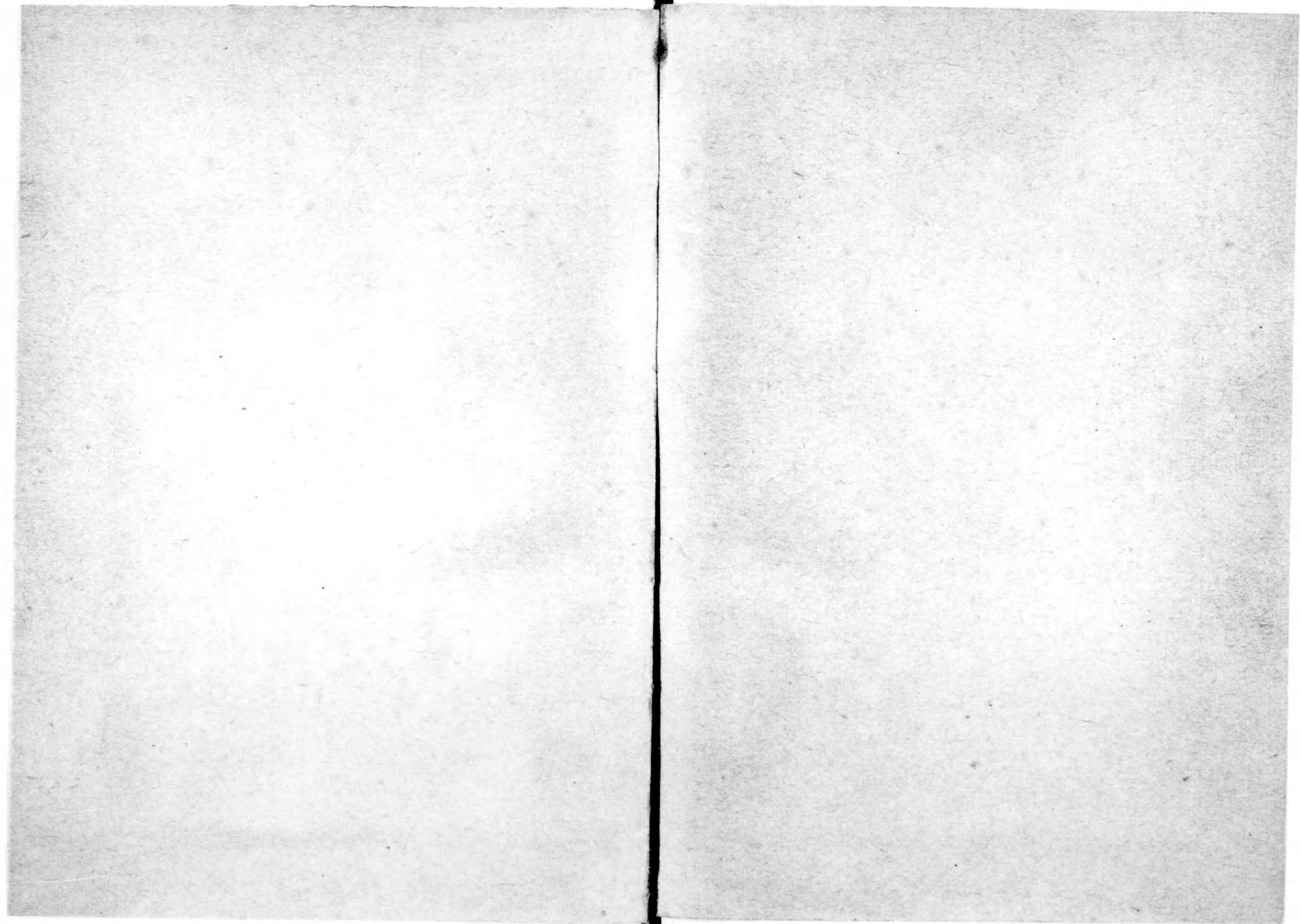
東京市日本橋區本銀町二丁目八番地

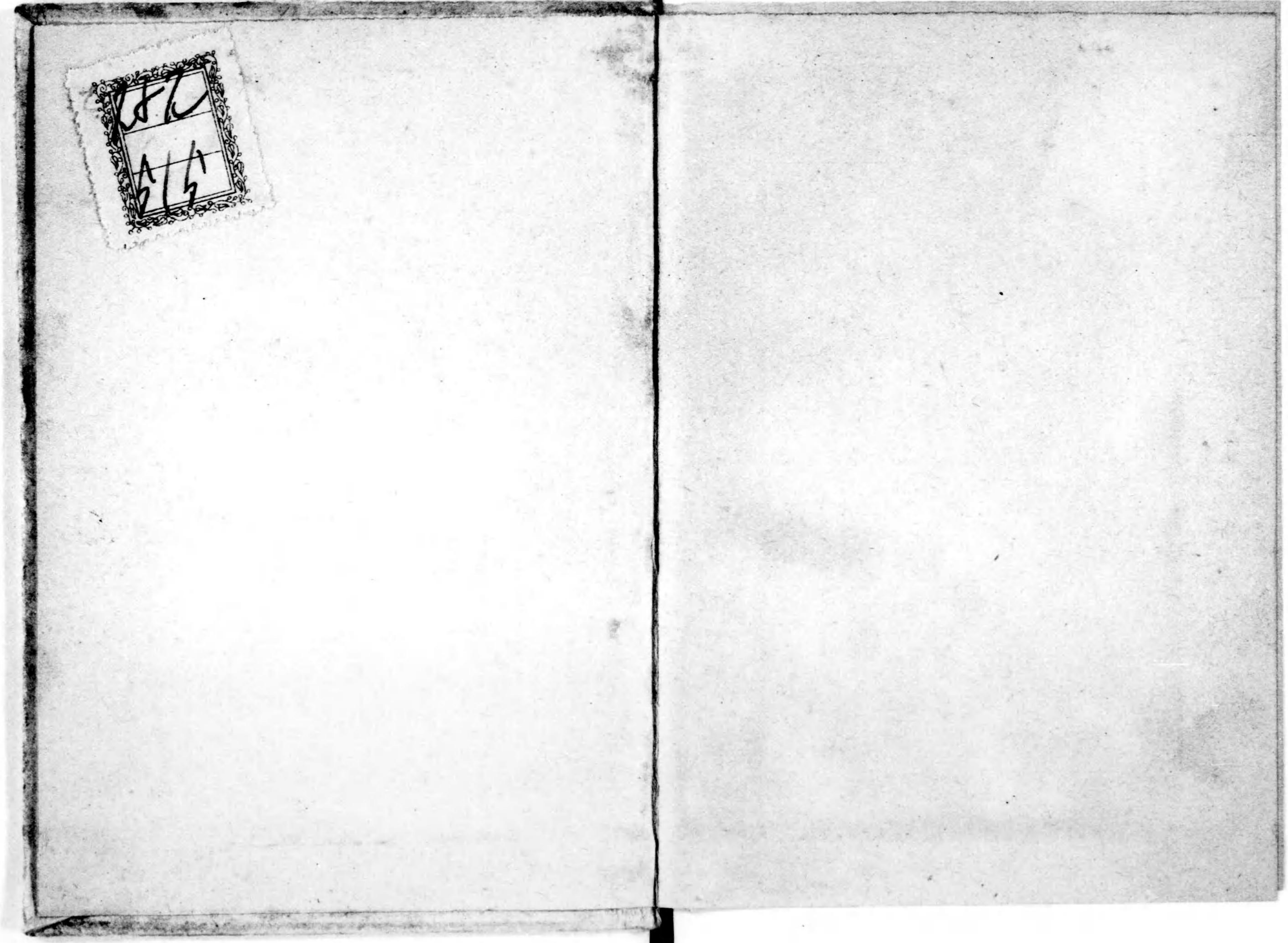
冬

夏

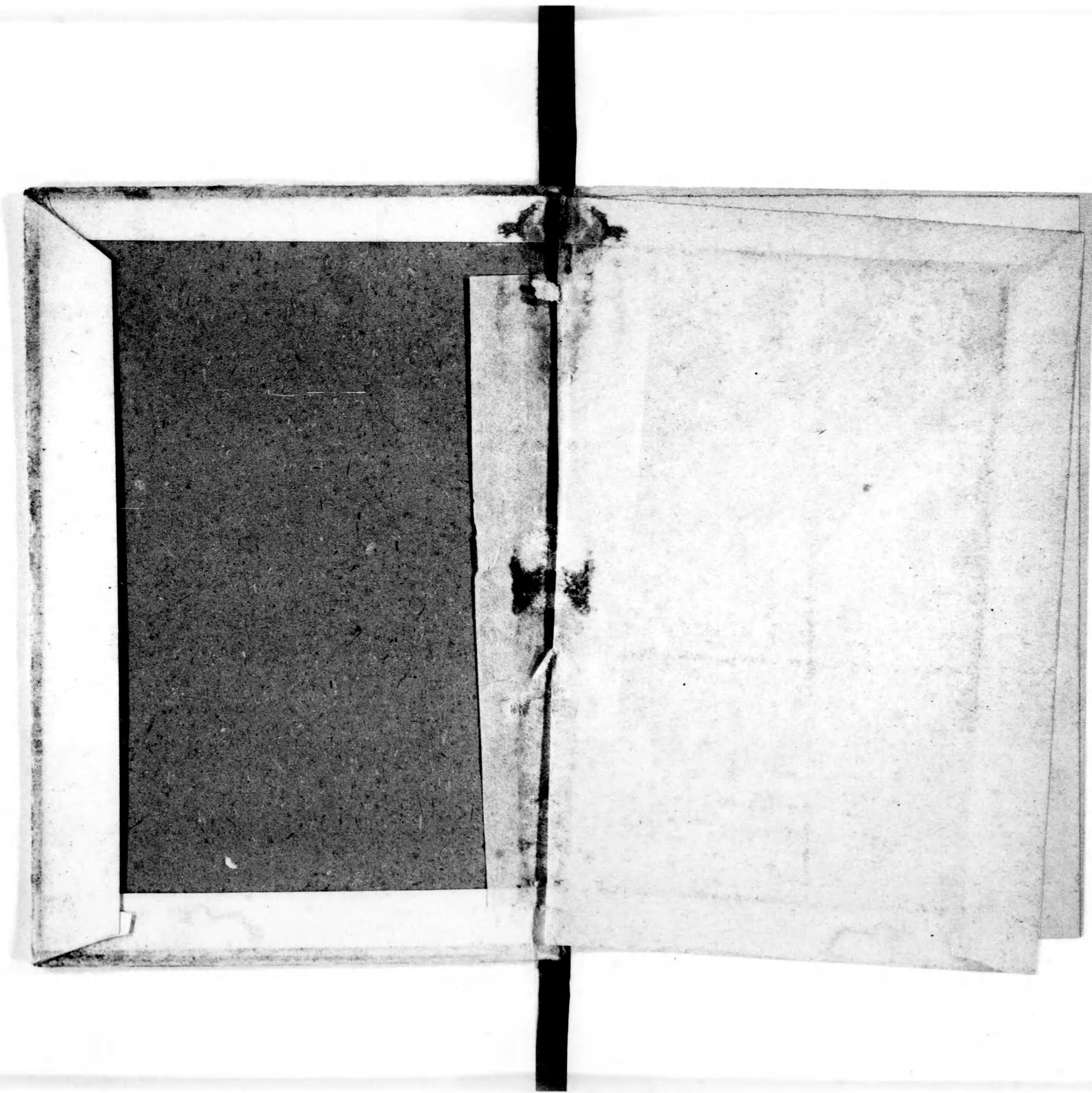
社

振替東京四五四四六
電話本局三一三二番





W. L.
A. L.



終

